

愚中周及の人と作品

The personality and works of Guchū Sūkyū

蔭 木 英 雄

一、はじめに

愚中周及を開祖とする仏通派は、所謂五山派ではない。しかし、夢窓疎石を受業の師とし、夢窓派の春屋妙葩・龍湫周沢・古劍妙快・絶海中津・黙庵周論・空谷明応らや、聖一派の性海・靈見・岐陽方秀ら、それに永源派の靈仲・禪英らと親交を結んだ愚中周及は、中世の五山文学を考へる場合、逸することの出来ない人である。なぜなら、愚中は『草餘集』という外集を現在に残しているのであり、中国語に堪能で、何よりも、後進の徒の詩文の指導に力を尽くしているからである。

『草餘集』(五山文学全集所収)という集名は、江戸時代の天龍寺住持であつた桂州道倫の書いた「大通禪師語録序」によると、

集有三五卷、名『卯餘集』。卯者何。合猛切、金玉未成器

愚中周及の人と作品

也。天工開物云、採工籌^レ灯^レ逐^レ往^レ、施鑿得礦方止。凡成^レ銀者曰^レ礪、至^レ碎者曰^レ沙。卯者其外包環石塊者也。卯石大者如^レ斗、小者如^レ拳、為^レ棄置無用之物一云々。

○卯『集韻』に、卯、胡猛切、金玉未成器也」とある。あらがねのこと。○天工開物『三卷の書物、明の宋応星の撰。

とあるように、無用のあらがね」という程の意味である。それは鉄菴道生の『鈍鉄集』や、義堂周信の『空華集』、或いは『東海一瀾集』の集名のように、自己を無能者と見なす自卑意識と、詩文を無用視し、または自作を謙遜する心情から出ているのである。愚中のかかる意識は、且夫某何者也。愚而尤野、埋没而隨三百草者、不^レ在^レ辨矣(雲門一曲軸跋)という文章にも、はつきりと表れている。『草餘集』の作品は、分類してみると、偈頌が三百二十九(その内、七言四句が二百六十九首) 仏祖贊一八十一 下火一三十八 自贊一七十六 法語一六十三

小仏事―六四、字説など―七十七 祭文―九 序跋―六
書―六

となり、七言四句の偈頌が最も多い。そしてその内容も、いわゆる蔬筍の気のある禪詩であつて、風流韻事や身辺雑事をうたう俗様の作品は皆無と言つてよい。

二、略年譜

愚中の行履について私の新発見はなく、彼の作品を読む上の参考の為に『大通禪師語録』六の年譜を簡略に示しておく。(数字は数え年)

元亨三年 (1) 美濃土岐郡に生まる。

嘉暦二年 (5) 師僧から法華経普門品を教えられる。

同 三年 (6) 奥州より通りかかった旅の異僧が、「性海無風

金波自湧」の句を授けて去る。

元徳元年 (7) 父に連れられて郡内の東山教院に行き、ここで釈

教の典籍を学ぶ。

建武二年 (13) 叔父の妙南禅人を頼つて上京し夢窓国師に参侍す。

背が高かつたので、「高沙弥」と呼ばれ、春屋妙葩に随侍す。

建武三年 (14) 春屋が繁忙だったので鑑翁土昭に侍し、龍湫周沢

・黙庵周論にも親炙す。

建武四年 (15) 夢窓の友雲庵の偈に和する作あり。

暦応二年 (17) 比叡山で受戒し臨川寺に帰ると、或る僧が外学を勧めた。愚中は、「仏語祖語すら尚ほ学ぶべからず。況んや異端に於てをや」と述べ、密かに城北に隠棲する。

暦応四年 (19) 建仁寺に掛錫す。秋、博多を出て冬明州に到着したが、賊船と間違われて上陸し得ず。

康永元年 (20) 船中に水が尽き、同志と雨乞いの円通懺摩法を修し、その効験によつて貿易だけを許される。商人と共に密かに上陸した愚中は、曹源寺の月江正印に参じ、「愚庵」の道号を授けられる。

康永二年 (21) 同郷の密禅人の勧めで、金山の即休契了に参ず。

康永三年 (22) 即休の書状侍者となる。

貞和二年 (24) 衣鉢侍者となり、朝夕に諸家宗師の語脈を商量す。

貞和三年 (25) 即休より大慧宋杲と鼓山長老の問答の法話を聴き、

脱然と契会す。

貞和四年 (26) 日本の修行僧は愚中の縁から金山を安息所と称し、

多数往来す。

貞和五年 (27) 癸亥集を著わす。

観応元年 (28) 病氣になつた愚中に、即休は帰国を勧め、送別の偈を与える。

観応二年 (29) 北野天神の加護により無事に四月博多に帰着。六月

兵庫の広厳寺に憩う。七月夢窓国師を省観し、

嗣法を即休に易える事を告げるが掛塔を許される。

即休示寂の報あり、夢窓も九月三十日に遷化。

文和二年 (31) 旧交の龍山徳見に請われ、南禅寺書記となる。一

僧に嗣法を問われ、即休と答えて迫害を受く。竺

堂円瞿の請により、万寿寺の維那となる。

文和三年 (32) 南禅寺内の少林院に居す。即休の教えを思い出し、

「林丘の素、愆ふべからず」と述べて京を出る。

文和四年 (33) 摂津の栖賢寺(尼崎市)に寓す。

延文二年 (35) 播磨の安田北山(加吉川市)に寓し、「太はだ野情に

適す」と喜ぶ。

延文四年 (37) 安田を出て、処々に寓す。

貞治元年 (40) 丹波の神池(兵庫県氷上郡春日町妙高山)

貞治三年 (42) 横山(京都府船井郡横生村か)の西巖(明不)に庵居するが、多数の

僧が往来するようになり、さらに避けて丹後の世

野山(明不)に庵を結ぶ。

貞治四年 (43) 丹後の漆原(舞鶴市)に移る。時に靈仲禅英は大中

臣那珂宗泰と相談して、愚中を金山天寧寺(福知山市大谷)

に居らしむ。

応安三年 (48) 南禅寺少林院の同門の人が栖賢寺の住持にしよう

としたが辞退する。

応安六年 (51) 慧日寺(兵庫県氷上郡山南町太田)の特峰妙奇は弟子を愚中に参ぜ

しむるが、拒絶する。

永和二年 (54) 春屋妙葩の『雲門一曲』の後跋を書く。

永和三年 (55) 春屋を丹後の雲門庵(舞鶴市)に訪う。

康暦元年 (57) 天寧寺のそばに大因庵を営む。

永徳元年 (59) 丹後の九世戸に遊ぶ。

康応元年 (67) 天寧寺を退いて土佐の五台山(庵か)に遊ぶが、那

珂宗泰父子が迎えにくる。

明德四年 (71) 「稟明抄」(禅学大系)を著わす。

応永元年 (72) 普甲山に登り雲莊庵に居すが、細川頼元は天寧寺

に帰るを請う。

応永三年 (74) 金山を出て紀州の根来寺に寓す。安良見氏は龍門

庵(後に禅頭寺)を創り、愚中を開山に請う。

応永四年 (75) 八月、九州に赴く途中、安芸の小早川春平に請わ

れ、御許山仏通寺(高坂市)の開山となる。

応永六年 (77) 山頂に含暉亭を作る。

応永七年 (78) 七月末、金山天寧寺に行く。

応永八年 (79) 天寧寺を去り播州杉原の安楽寺に寓し、近くの幽

僻地に景德庵を建てて。冬仏通寺に帰る。

応永九年 (80) 仏通寺の傍に肯心庵を構えて門を杜す。

応永十年 (81) 四方より雲納集まり、寺外に向上庵を建てて収容

し、修行に励む。

応永十一年 (82) 冬、那珂宗泰の病を聞き、天寧寺に赴く。

応永十一年 (83) 金山より仏通寺に帰り、喜悅堂を建てて。

応永十五年 (86) 足利義持に招かれ、山崎まで到ったが、「老僧誓

いあり、帝郷に入るべからず」と入京せず、伏見

蔵光庵に義持が来参す。十月、紀州の禪頭寺に赴く。

応永十六年 (87) 紫衣を受く。天寧寺に帰り八月二十五日に示寂。

九月十三日仏徳大通禪師の勅諡号を賜う。

三、教えを受けた人々

右の略年譜でもわかるように、少青年時代の愚中は、多く夢窓派の人々の教えを受けていたのである。夢窓は『三会院遺誠』で弟子を上等から下等に分け、修行不_レ純、駁雑好_レ学_ヲを中等の弟子と称したが、学問・詩文を道元の如く徹底して否定はせず、彼自身『夢窓国師御詠草』の如き和歌や、語録中に詩を多く残している。少年愚中はこの夢窓に参じ、十五歳の時には、次のように友雲庵の偈に和したりなどしているのだから、文学的指導も受けたに違いない。

巖樹陰森日易_レ暝 巖樹陰森として日は暝_ルひ易く

無心来往洞中雲 無心に来往す 洞中の雲

凝然一榻乾坤闊 凝然たる一榻乾坤闊く

物外逍遥趣不群 物外に逍遥して趣き群ならず

○無心_ニ陶潜「_ニ帰去来辞_ニ」に「雲無心以出_ル岫」とあり岫は岩洞。

○凝然_ニ心_ヲが集中して動かぬさま。じつとすること。

(訳) 岩上の樹木はこんもりとして日はかぎろい易く、無心に入入りするのは岩洞の雲。じつと禪榻に坐れば天地はからりと広く、心

は俗世間の外に遊んでこの情趣は並々でない。

十五歳にしてかかる詩偈をものする才能は並々ならぬものがある。夢窓門下の古劍妙快は、

本_ト是_レれ吾_ガ家の跨_ニ竈_ノ児_ト (次韻寄金山愚中禪師)

と詠じているが、跨_ニ竈_ノ児_ト父の夢窓にまさる子供_トというの
は、単に禅道のみではあるまい。

春屋妙葩も愚中が少年時代に参侍した人で、夢窓国師の俗姪でもある。この人は初代の鹿苑僧録となり宗教政策に腕をふるい、夢窓派の教線拡張に力を尽くした人で、学問・詩文の方でも五山版出版の事業を興したり、『雲門一曲』の詩集を残したりしている。愚中は、

靈山而則笑_レ花 少林而能分_レ髓 王者軌範超_ニ古人_一 唯我

金剛大士耳 (普明国師)

○第一句_ニ靈山の拈花微笑の故事をいう。ここは春屋の得法を指す。

○第二句_ニ祖慧可が達磨の法の真髓を得たこと。ここは春屋が夢窓の法を嗣いだことをいうか。

と厚く尊崇し、『草餘集』巻頭には「寄春屋和尚」を置き、春屋も「次韻酬及書記」「次韻答及書記」「老懐一首寄及書記」

(智覚普明国師語録)などを作り、応酬詩が多い。臨川寺復位事件は、政界では細川頼之と斯波義将、夢窓派では春屋妙葩らと龍湫周沢ら、真二つに分れて争つた事件であるが、愚中は「客至忽聞_ニ臨川寺為_ニ五山_一。借_レ韻賀_ニ祖塔光顯_一云」と題する作をものして祝っている。これは一見、愚中が細川頼之

龍湫周沢・曇芳周応らの昇位派にくみしていることを示すようだが、彼はただすなおに、少年時代に夢窓に侍した臨川寺の名誉を喜んでいたのであり、両派の抗争からは超越して、春屋を尊敬しているのである。

龍湫周沢は不動明王を画いて有名で、詩文集『随得集』を残している。愚中は「直饒身を千億に化し得ても、端的に師の大恩に酬ひ難し」（和龍湫和尚見招韻）と吟じて、師恩を謝しているのである。

さて、黙庵周論だけは夢窓門下にあつて、いささか禅風を異にしている。仲芳円伊の「東禅黙庵和尚」の、

蹉脚跨^二寂室之門^一、麒麟掣断^二黄金索^一（中略）別立^二家法^一、不^二敢雷同^一。或時高峰孤頂、独立单丁、嫌^レ仏不^レ做、或時古渡頭辺、和泥合水為^レ法忘^レ身。

○蹉脚^二足をたがえる。夢窓派でありながら永源派の禅に入ることを目指す。○雷同^二定見なく人の説（^二夢窓派^一）に従うこと。○和泥合水^二慈悲の為に全くそのものに同化して人を救済すること。

という文章を読むと、黙庵は夢窓派内にあつても孤高で厳しい禅僧であつたらしく、後述する愚中や寂室の宗風と一脈通ずるものが感じられる。

十四歳の頃の愚中が侍した鑑翁土昭の人となりはよく分らない。南山土雲の法を嗣ぎ、天龍寺首座の時の殿堂新建に乗扨問答し、そのあと、「虚玄大道 無^レ著^二心宗^一」 暨^レ抹^レ横^レ該^二七穿^一八穴^二と説破している。慧林寺に出世し、京の万寿寺に住した

あと東福寺二十九世に遷り、宝寿庵に退休して延文五年十一月四日に示寂したが、「末後一句 如何説出 更莫^二認著^一」更莫^二認著^一 という遺偈を読むと「先翁董^二五山之四^一、声価潑天、紹^二箕裘^一者亦還稀、具^二韜略^一人能有^レ幾、屈^レ指可^レ数、舎兄焉求」（友山士徳「鑑翁和尚住東福法眷疏」）と共に、鑑翁が単なる学僧・詩僧でなく、不立文字の真髓を会得した人であることが窺える。

次に愚中が中国で最初に参侍した月江正印は、来日僧の清拙正澄の血縁の兄に当り、友山士徳や一峰通玄らの日本僧を多く接化した人で、その語録は早く出版され、よく読まれている。

最後に、迫害を受けつつも愚中が嗣法の師と仰いだ即休契了という人は、どういう禅僧であつたか。愚中との關係に於てその宗風を見てみよう。

愚中は十九歳で建仁寺に掛錫していた時、一日疑を發して長老の高山慈照に問訊したが、疑問は全然解決しなかつた。そこで彼は、「この建仁寺は由緒の古い禅寺で、住持は万人の傑でないとしても千人の英である。然るにかく淺易であるのなら、私は誰に依つたらよいのか。大唐の善知識を尋ねるに如かず。」と決心し、天龍寺船に便乗して渡元したのである。当時の留学僧の多くが文学修業の為に海を渡っていたのに、正法を求める愚中の決意は並々ならぬものがあつた。彼は先ず曹源寺の月江正印の下で孜々参究するが、月江に勧められて諸方の禅席へ行脚に出る。湖州万寿寺に掛錫した時、三十年間も在元している

同郷の密禪人に出会い、「公はどんな善知識に参じたいのか。」と問われ、

「行解相應、得二語言三昧一人、欲二親近一耳。」密曰、「金山即休和尚乃公之師也。」

○行解相應||實際的修行と理論的理解とが一致していること。『学道用心集』に「不レ拘二我見、不レ滞二情識、行解相應、是乃師也」とある。

○語言三昧||語言のほかに何もものもない境地。一切の現象はみな真実を表現する言語であるとみること。『無門関』二十四に「且離二却語言三昧、道将二一句一來。」とある。

と問答を交わして、二人で即休に参じたのである。〃行解相應、語言三昧〃の人という線で師を求めた愚中は、即休の膝下で書状侍者を勤め、師に代つて多くの尺牘を書き詩を作つて二人の官人を感じさせ、非凡なる文筆の才を示す。しかし或る時、教乘に精鍊せる玉山□皓という耆宿が、愚中の質問に一つ一つ明答するのを聞き、彼は慨然として、

夫仏祖道、離二文字語言相。吾動固二於名相、膠二於文筆、不レ能二洒々落々。何愚哉。

と反省した。玉山□皓はいわゆる反面教師であつたのである。そして即休からも、

你只向レ他欲レ開レ口、便遭二打落水中処。一
と叱責されて、頓に身心息み、枯槁の如くなつたという。

愚中は二十五歳の時、即休から大慧宋杲と鼓山長老の竹篋の法話を聞き脱然大悟する。その時、師に呈した頌が次の作である。

不知禪者非禪者 禪者か非禪者かは知らず
二十余年只一疑 二十余年只だ一疑

打破鼓山塗毒鼓 鼓山の毒を塗りし鼓を打破すれば
普天匝地尽弥々 普天匝地 尽く弥々たり

○第一句||〃禪を知らざる者は禪者に非ず〃とも説めるが、それでは平板で、愚中のひたすらの疑を読みとる為に前掲の如く讀んだ。○一

疑||「年譜」曆應四年の項の「一日長老上堂。師有レ所レ疑、乃上問訊、所レ疑、不レ決。」とある。○鼓山||大慧宋杲の法孫の鼓山宗遠。東禪

思岳の法嗣で、「大慧普覺禪師書」下に「答鼓山遠長老」がある。

○毒鼓||衆生の五逆十惡を毒鼓の音で抹殺して、大乘の極致を説いて仏道に入らしめること。○普天匝地||天地全体。『圓悟語録』に、現成

匝地、是一箇大解脫門」とある。

〃私自身禪者なのか禪者でないのかはどうでもよく、ただひたすら一疑を解こうと苦しんできた。今、鼓山長老の慈悲の毒鼓を打ち破ると(正法の契機をも否定すると)天空も大地もすべて自然法尔の世界〃という程の意味であろう。禪体験のない筆者にはこれ位しか解せぬが、よく愚中の悟境を示している。その時、即休は日本に帰国しようとする彼を留めて、

鷄声唱徹炎天暎 鷄声唱徹す 炎天の暎

已向声前契祖機 已に声前に向かつて 祖機に契ふ

楊子江流東入海 楊子江の流は東のかた海に入れど

臨流未可買舟帰 流に臨み未だ舟を買ひて帰るべからず

はじめの二句は「父母未生以前」の機を透閃した悟境を表わし

ているのである。暁天をつらぬく鶏声は「天上天下唯我独尊」の釈尊誕生の第一声の如くであり、愚中がそれ以前の「廓然無聖」（からりとして何もなく、尊いものも無い）の祖機を契悟した事を、即休は称えるのである。「廓然無聖」とは西から東にやって来た達磨が、梁の武帝に示した語であるが、第三句は達磨以来脈々と流れてきた禅の正法を、さらに愚中が東海の日本に持ち帰ろうとするのを詠じており、結句で即休は彼の帰国をひき留めるのである。さすがに、

了即休詩僧。日本ノ愚中及侍者ヲ唐ニ渡テ、法ヲ即休ニ嗣ゾ。（『蕉窓夜話』）

と、詩僧と誤解されるだけあって、含蓄の深い作品である。この即休の慰留に従って愚中はなお金山に足を留め、即休の「雪子吟」に和韻する。

谷響若非真賞音 谷響若し真に賞音するに非ざれば

松風永夜不鳴琴 松風も永夜琴を鳴らさず

更令雪曲別相似 更に雪曲をして別に相似しむれば

林下誰人免陸沈 林下誰人か陸沈を免れん

○賞音―風流韻事を解すること、又その人。なお、「知音」という語は、伯牙が鍾子期の弾ずる琴の音をよく理解した故事があり、第二句の鳴琴にかかる。○松風―即休の教えを喩える。○雪曲―白雪曲。琴曲の名で、高尚で古来唱和し難い曲。これも即休の禅を喩える。

○陸沈―世にあわず、亡びること。

（訳）山彦がもし真に音を理解する者でないなら、松風も一晚中琴の如

き美音を鳴らさぬだろう。そして高尚な白雪曲のように奏でるなら、松林で（禅林）誰も正法を離れないであろう。

これは即休の接待を謝し、その高風を讃仰すると共に、師風を継いで正法を興す愚中（―谷響）の決意をうたっているのである。比喩が美しく適切で、格調高い作品である。即休はまた頂相に自賛して愚中に与えた。

妙高峰頂行舟 妙高峰の頂に舟を行め

楊子江心走馬 楊子江心に馬を走らす

唐人不識這容儀 唐人這の容儀を識らず

付与日東及侍者 日東の及侍者のみに付与す

○妙高峰―須弥山のこと。○楊子江心走馬―即休の前作の「楊子江流東入海」の句に拠る。なお「趙州録」中に「走馬到長安」の語がある。はじめの二句は禅特有の逆説的表現で、自在の境をうたい、さらに悟得して東帰する愚中を送る言葉でもある。多くの中国僧の中から、愚中だけが印可を与えられたのは、二十五歳の時であった。

即休は愚中を非常に厚く信頼し、その余徳は他の日本僧に及ぶ。つまり、愚中を訪ねてくる日本僧に、綿衣や医療を施し食事を与えた。その中には、石室善玖、龍山徳見、石屏子介らもいて、彼等日本僧は金山を「安息所」と称して喜んでいたのである。

印可を受けた翌々年、愚中は『癸亥集』という書を編んだ。書名は彼の生年の甲子であるが、その内容は全く不明である。

私は彼の偈頌を中心とした作品集ではなかつたかと臆測する。後世「詩僧」と称されたとはいえ、即休のきびしい禪風から想像するのである。この『癸亥集』の序は即休が書き、跋は虞伯生が筆を執っている。字が伯生の虞集は、薩都刺らと共に元代四傑の一人で、いわゆる金剛幢の古林清茂と親交があり、後世の惟肖得巖・希世靈彦・横川景三らに尊崇された詩人で、愚中も親疎のほどは分らないが、在元中に接触があつたものと思われる。

私は先に「即休のきびしい禪風」とつい書いてしまつたが、いま少し説明を加えておく。先にも記したように、愚中は「語言三昧の人を得て親近せんと欲し」、即休を撰んで参侍したのであるが、即休は、「道を見ざれば、言は展ぶる事無く、語は投機すること無し。句に滞る者は迷ひ、言を承くる者は喪ふ」と、文字に拘る愚中を叱責し、帰国に際しては、「你郷国に帰らば出世を要せず、須らく是れ山林の樹下に坐を得て披衣すべし。」と隱遁する事を厳しく教えているのである。

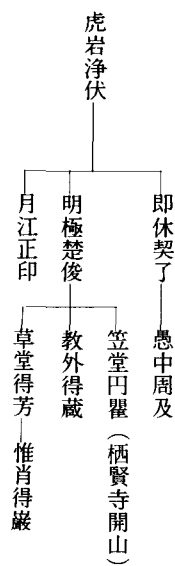
以上、愚中周及が教えを受けた人々について略述したのであるが、これら師僧・先輩の指導と彼の秀れた資質の上に、『草餘集』の作品が作られたのである。

四、宗風と詩風

帰国した愚中は受業の師の夢窓に暖かく迎えられた。夢窓は既に愚中が嗣法を易える意志を抱いている事を、黙庵周論から聞き知つていたのだが、臨川寺に掛塔することを許す。もしかしたら先述のように宗風をよく似た黙庵の親身な取りなしがあつたのかも知れない。『臥雲日件録抜尤』（寛正四、五、四）に、黙庵の法孫の元宗康緒の言葉として、

壮年有度唐之志、将_下与_二古劍等_一同行_上。然開山留_レ之曰、「縦_一到_二大邦_一、不_レ可_レ得_二過_レ我之師_一云々。」故不_レ果_二其志_一。

と黙庵が渡海しなかつた事情を記しているのは、夢窓が如何に黙庵を信頼し引き留めようとしていたかを示し、私の推測（黙庵が夢窓に取りなした）の傍証ともなる。愚中は夢窓の寛容と慈悲に感激したのであろう。夢窓の示寂後、その塔下に三年間服喪するのである。そして、喪があけた三十一歳の時、元での知友の龍山徳見に懇望されて南禅寺の書記となり、就任の翌日に淋汗疏を作つて中国僧の東陵永嶼に激賞される。在元時代に即休の代りに金山仏殿上梁文を書いたり、中国語に堪能で⁽⁶⁾及蔵主の前身は中国人であつたのだらうと古源邵元を感服させるほどであつたから、淋汗疏などは朝飯前であつたに違いない。しかし結制秉弘の時、即休に嗣法する事を表明して、その夜不意の変に遇い、⁽⁷⁾少林院に退くのである。少林院の開山は明極楚俊で、即休とは同門である。



この年の暮れに笠堂円翳に請われて万寿寺の紀綱になるものも、三十三歳の時に教外得藏の住持する栖賢寺に寓するものも、虎岩派の同門の誼からであった。右の法系で、即休や草堂という人達が隠逸に徹したということは、虎岩派の宗風を窺わせる。愚中も三十一歳のある夕方、師の語を思い出し、「林丘の素、愆なふべからず」と翌日に京塵を離れるのである。

以後、愚中は播磨の安田北山、丹波の神池、さらに奥まった横山、丹後の世野や漆原に世を避けて転々と移り住む。それは甲州竜山庵、濃州虎溪庵、相州泊船庵、土州吸江庵など幽遠景勝の地に転住した(傍点のことが愚中と異なる)。夢窓や、中国地方に転々と韜晦した寂室元光の行履に似る。

貞治四年の四十四歳の時、丹波の三岳地方を支配していた武士の那珂宗泰は、霊仲禅英（寂室元光の法嗣）と相談して、愚中を金山天寧寺に招く。彼は「金山は江南の縁遇の地」と招請に応じたが、寺内に修行僧は十余人しかいなかった。しかし、或る時は雪中に坐禅してしかも衣服を減らし、或る時は夕方から朝まで月下に立禅するなど、烈しい修行を重ねるのである。かかる厳格な禅風を守り続けたので、石室善玖や特峰妙奇（夢

窓の法弟）は自分の弟子を愚中の会下に遣わして修行させ、山中山外に修行僧が次第に群居するようになった。ここで、愚中の詩風について少し考えてみよう。前にも述べたように、『草餘集』は全く純然たる禅詩、禅文によって占められ、俗様の詩は一篇だにない。

黄菊開偏

黄菊開偏一叢金 黄菊開偏す 一叢の金
無価色光幽復深 無価の色光 幽復た深し
生活莫如栽菊好 生活は菊の好きを栽うるに如くは莫く
富而不濁道人心 富めども道人の心を濁らしめず
菊の価値のつけられぬ幽深は愚中の心境もしくは願望であり、

雪団吟

象王忽自峨眉到 象王忽ち峨眉より到り
白馬遠従西竺来 白馬遠く西竺より来る
同是許多官路上 同じく是れ許多官路の上
不曾半点惹塵埃 曾て半点だに塵埃を惹かず
○象王||仏陀又は菩薩をたとえる。○峨眉||蜀、すなわち四州省峨眉

界の名山。王世貞「漫興」に「峨眉天半雪中看」の名句がある。

○白馬||象王と共に白雪をたとえる。○官路||官署への大通り。

この二十八字も写生や風流韻事でなく、仏の世界から降り来る雪をうたう。このように菊を見て雪を吟じても、篇々是れ愚中の禅的心境を示すものばかりである。これは当然の事のように思われるが、当時の他の文学僧と比較する時、この禅林文学

として当然のことが、彼の詩の第一の特色となつていたのである。愚中は、

詩は志なり。志有りて詩無き者、或は之有り。志無くして詩有る者、未だ之有らざるなり。(次鈞上人泛月韻并序)

と、詩經大序以来の儒教的詩觀を述べているが、彼の真意は、禪詩は道人の志なりという修飾語をつけて解すべきであろう。この作の最後の聯に、

不踏華鯨不騎鶴 華鯨を踏まず 鶴に騎らずんば

争如学仏作金仙 争でか仏を学び金仙と作るに如かん

○華鯨＝鐘と種木。次句の学仏に對す。李白は自ら騎鯨客と稱す。

○騎鶴＝仙人に化す法。次句の金仙に對す。又、騎鶴上揚州の語は、決して実現しない妄想を喩える。○金仙＝仙人、又は仏をいう。

と詠じているのであるから、私の解釈は全くの的はずれではない。さらに愚中は、「次祐侍者初春偶作韻」の序で、古曰、苟非其人、道不虛行（然るべき徳のある人でないと、道は行われない）という『易・繫辭』の語句をひいたあと、

道の言たるや内外に博通す。而して一隅を守れば則ち其れ可ならんや。今、初春の佳什を覽るに、風雅の道と謂ひつべし。

却て斯の人を得たるなり。是れ天の之を助くるを知る。能く法柄を執りて祖宗を興すは、且らく其の時を待つのみ。

と述べる。之に私解を加えるならば、風雅は道の一隅であり、之を拡充發展させることによって、仏法、祖宗の道を興す事が出来るというのが愚中の考えなのである。彼は道元や蘭溪道隆

の如く風雅の道＝詩文を否定するのではなく、仏道の一助として認識していたのである。次の作品も同様である。

大疑

文章若是敵生死 文章若し是れ生死に敵せば

泉下諸君誰在官 泉下の諸君は誰か官に在らん

為問孔丘堂上客 為に問ふ 孔丘堂上の客

不知仁本作何顏 仁本を知らずして何の顔を作さん

承句の「官」は「雪団吟」の「官路」と同じく、禪の悟境を指すと見てよい。文章が生死の一大事究明にさまたげとなるなら、亡くなつた諸禪師はどうして悟境に入れたであろう。文章

は孔丘の徒の仁本と同じような存在なのだ」と詠じているのである。『草餘集』には次のような題の作品もある。

雪中凍坐、忽記古詩兩句云……

愚中は寒中に坐禪している時、ふと古詩を思い浮かべるのである。「こういう坐禪は無念無想でない」とか、「只管打坐に徹していない」とか、禪體驗のない筆者は批判する資格はない。

しかし、室町時代も半ばを過ぎた五山僧には、こんな作詩の契機は見られない。その坐禪中の作品というのは、

白鷗吟

雪如毛羽寄身閑 雪は毛羽の如く 身を寄せて閑なり

浪跡浮生湖海寬 浪跡に生を浮かぶれど湖海寬し

纔有機心飛不願 纔かに機心有りて飛ぶことを願はず

從教斫額望長干 從教 斫額して長干を望む

○浪跡―波のあと。鮑照「遠都道中作」は「飄々浪揚白鷗」と、浪の白いのを白鷗にたとえる。○機心―いつわりの心。『魏志』高柔伝の注に「機心内萌、則鷗鳥不_レ下」とあり、巧詐の心があると鷗は寄つてこずに飛び去る。○斫額―手を額にかざし、じつと視るさま。○長干―金陵の里巷の名で、吏民が雜居する所。

起・承句は白鷗をうたうと共に自己を詠する。即ち雪中に埋もれて（白鷗のようにまっ白になって）坐禅しているが、悟りの性海は広く、この身は浮生のようだ。〃という意味。白鷗は無心の人には近づき、機心の有る人からは飛び去る。〃私もふつと機心が動いた。が白鷗よ、飛ばないでくれ！〃とうたった愚中は、結句で自己を白鷗に同化させる。〃機心を起して禅僧としては落第だが、やはり遠くの都（悟境）を望むのをどうしようもない。雪中の坐禅の場面に適わしい作品で、白鷗と自己との影像を交錯して、禅修行者の心理を巧みに詠じ、しかも技巧の跡は見られない。なるほど、こういう風雅の道をつき進んで行けば、祖宗の道を興すことも出来よう。俗人の筆者でも、〃詩禅一如〃の世界とはこういうものなのか、とおぼろげに感得させられる佳品である。しかし、愚中は風雅の単なる延長線上に、仏道の真諦があるとは考えていない。

止胡説

兎角方円非我事 兎角方円 我が事に非ず
亀毛長短与誰争 亀毛の長短 誰と争はん
塊然孤坐大因裡 塊然として大因裡に孤坐すれば

月在楞伽山頂明 月は楞伽山頂に在りて明るし

○兎角―亀毛と同じく、この世に存在しないもの。本来無であるのにも有であると執着すること。○大因―大因陀羅は密教で方形の壇のことだが、ここは天寧寺の側の大因庵。○楞伽山―仏陀が楞伽山の絶頂で自言自証の法を説いたのが「楞伽經」である。

右の一・二句で絶対無・絶対否定を置き、絶対無の中にじつと孤坐する時、仏が言詮を離れる事を説いた楞伽山頂の明月を見るのである。この明月が、いわゆる花鳥風月の風雅の月でないことは明らかである。風流韻事の月と心月との間には、〃塊然孤坐〃がなければならぬのである。

次丹丘芥室和尚述懷韻

老禅方丈日如年 老禅の方丈 日は年の如く
落得細論文字禅 落し得たり 文字禅を細論することを
刮膜須還金色仏 刮膜須らく金色の仏に還るべく
鍊丹豈若地行仙 鍊丹 豈に地行の仙に若かんや
夢中榮辱有何命 夢中の榮辱 何の命有らん
毫末功名未必天 毫末の功名未だ必ずしも天ならず
風月打開無尽藏 風月打開す 無尽藏
破沙盆内煮山川 破沙盆内に山川を煮る

○丹丘芥室和尚―丹後雲門庵の春屋和尚。○文字禅―宋の覚範慧洪の「石門文字禅」三十卷。しかしここは、文字法師の禅、即ち実践を伴わずに文字文章から禅を究めようとするもの。○細論―杜甫「寄李白」に、何時一尊酒、重与細論文の用例がある。○地行仙―地上の仙人。

人の長寿を祝う語。○破沙盆こわれたすり鉢。無用のもの。

頤・頸聯は春屋和尚の高徳と長寿を称えて、南禅寺山門事件及び臨川寺十刹復位事件によつて京寺から丹後に退いたことを慰めていて、いわば儀礼的な対聯なのだが、首聯の「春屋和尚の方丈は一日が一年のように（充実し或いは悠々としていて）あれこれと文字・文章によつて禪をあげつらう境地から脱却し得た」というのは、愚中自身の心境の投影であろう。さらに尾聯で、「（榮辱や功名の瑣事を）風月は打ち砕いて無尽蔵の世界を展げてくれ、私は無用の器の中で、山川大地を煮るのだ」と、広大な世界を謳いあげる。言うまでもなく、「破沙盆」は単なる自卑・謙辞ではなくて、無用の大用、大拙即大巧を大らかに吟じているのである。愚中の詩風の第二の特色は、この大らかさにある。五十九歳の時の作品をあげてみよう。

天橋次韻

天橋不可不来遊 天橋は来遊せざるべからず

足見神仙巧運籌 神仙の運籌に巧みなるを見るに足る

巨蟒蛻鱗横曝背 巨蟒ちゅう鱗を脱ぎ横たはりて骨を曝し

長鯨露背未擡頭 長鯨背を露はすも未だ頭を擡げず

蟠桃結実乾坤老 蟠桃実を結びて乾坤老い

弱水無波日月幽 弱水波無く日月幽なかり

夜半憑誰藏袖裏 夜半誰に憑りてか袖裏に藏し

持将帰去壮皇州 持ち将つつて帰り去りて皇州を壮んにせん

（訳）天の橋立は一度は遊ばねばならぬ所 神仙の巧みな仕事が見られ

るから。大蛇のぬけがらが横たわり 長鯨が頭を上げずに背中をまる出しにしているよう。蟠桃が実をつけると天地は老い 弱水が波立たなくなる。日月は暗くなる（そんな事は絶対あり得ぬ。夜中に誰かに頼んで天橋を袖に入れ 持ち帰ってもらつて都を壮大にしてもらおう。第二句以下、天の橋立を写す語はどれも雄大で、天橋を巨視的に眺める愚中の壮大な氣風が表れており、前に述べた「雪団吟」の「象王」「白馬」の比喩も同様である。

愚中は嗣法の師の即休契了の教えを忠実に守り、決して京洛の巷に出ようとはしなかった。彼の偈頌にはこの宗風が濃くにじみ出ている。丹波槇山の西巖に隠棲した四十二歳の時の作品を読んでみる。

題丹之西岩屋壁

古来賢達貴中和 古来賢達は中和を貴び

或絶交遊独自過 或は交遊を絶ちて独り自ら過ごす

莘野耕夫千歳下 莘野耕夫 千歳の下

姓名不朽使人歌 姓名朽ちずして人をして歌はしむ

○貴中和聖徳太子「十七条憲法」に「以レ和為レ貴」とあり、「論語」にも「礼之用レ和為レ貴」とある。○莘野伊尹が隠れて耕した莘の野

題丹之西岩屋壁

我曾年少学柔和 我曾て年少のとき柔和を学び

老後工夫不此過 老後の工夫も此に過ぎず

昨日山童固相约 昨日山童固く相约す

常来与唱樵歌 「常に來れ、汝と樵歌を唱へん」と

○柔和Ⅱ『正法眼藏隨聞記』に「如来はもとより柔和を本とし、慈悲を心とす」とある。○樵歌Ⅱ木こりの歌

愚中は自分を伊尹に擬す。そして、少年の頃から老後に到るまで、柔和を学び工夫し続けるというのは、彼の性格がその対極のものであるからであろう。

題丹之西岩屋壁^三

大士多年望我能 大士多年我が能を望み

岩中独立冷如氷 岩中に独り立ち冷たきこと氷の如し

相逢依旧開慈眼 相逢へば旧に依りて慈眼を開き

笑我無能成老僧 我の無能にして老僧と成るを笑ふ

題丹之西岩屋壁^四

万事恻心無不能 万事心を拵れば能はざる無く

寒岩一夏坐層氷 寒岩に一夏層氷に坐す

秋來忽有他山興 秋來れば忽ち他山の興有り

啼鳥声々仏法僧 啼鳥声々仏法僧

自己を「無能僧」と称したり「無不能」すなわち万能とも言う。

それは差別相ではない。一夏を冷坐して絶対否定を行ずれば、

無能即万能なのである。第四首の最後の二句は、かの蘇軾の「

溪声便是広長舌」の有能無能を絶した境を示していて味わい深い。

い。

晩年の愚中は、自分の没後の仏通派の行く末を案じつづける。

當時の禅林で、孤立的な仏通派を存続していこうとすれば、や

はり最大門派たる夢窓派に頼らざるを得なかつたであろう。愚

中は「上常光国師書」で、

九月初六日(中略)茲者金山万端悼惶中、忽蒙哀愍。非唯自身、更使子孫永得大安穩者、实是看某薄面之故也。と述べ、「上絶海和尚書」でも、

九月初六日(中略)抑亦金山身上之事、每番因吾師一言、忝達于上聞。恩渥邁倫、驚人耳目。各々喝彩曰、「不思議不思議、若不託吾師、安有斯奇耶。」

と記して、空谷明応や絶海中津の仲介の労を謝しているのである。一生京塵に近づくまいと決意した愚中であつたが、その高い理想だけでは自分の門派の維持発展は望めなかつた。感謝の書簡を認める愚中の胸裡に、如何なる思いが去来したのであろうか。「白鷗吟」の転句でうたつた「機心」が纒かに浮かばなかつたであろうか。本意に反し、敢えて夢窓派の実力者に依頼せねばならぬ愚中の姿に、俗人の筆者はひきつけられるのである。

注

(1) 桂洲道倫(正徳四年一七一四-宝暦二年一七五二)「近世禅林僧宝

伝」によると、父の甲谷権兵衛は、京の三条の松前屋とも大阪北浜の人ともいう。幼くして京の延慶庵の雲崖の弟子となり、又、丹州の大道之可に參ず。その師承は明らかでなく、一説に靈源和尚の法を嗣ぐという。博学で書画をよくし、江村北海と雅交あり。

(2) 蔬筍の氣Ⅱ「詩人玉屑」二十の「禅林」の項に「無二蔬筍氣一」がある。

(3) 性海無風 金波自湧Ⅱふつう、海という本体が風という縁によって波を生ずる。性海とは、差別の生死を川に喩え、平等一如の涅槃を大

海に喩えたもの。「宏智広録」巻五に「譬へば湛水の風に因りて波を成じ、唯風滅するが故に動相の滅に随ふが如し」とある。

(4) 友雲庵偈―夢窓の作は「洞僻巖深昼若暝 一間竹屋半容雲 単丁自有単丁寮 不羨聖賢來作群」なお「友山録」下にも「和夢窓国師友雲庵韻」と題し、「一室蕭然対隙曠 道盈寰海瞻仍雲 餘薰何幸及痴鈍 来此又随騏驎群」がある。

(5) 「雪村大和尚行道記夾注」に「大鑑兄月江正印和尚、同受二業福州道山神光禅寺月溪和尚諱紹円」とある。

(6) 観応二年の「年譜」によれば、愚中は天龍寺の東陵永嶼の通事となる。

(7) 「蕉窓夜話」に「禅客ガ嗣法ヲ問タレバ、楊子江頭楊柳春 楊花愁 殺渡江入ト答タレバ、其夜門徒ガ起テ、ツラヲキッタゾ」とあり、「碧山日録」(長祿三、三、廿七)によると、刀で愚中の額を傷つけた者は後に発狂し、愚中は「この傷のお陰で叢林から脱け出て、塵外禅宴の楽しみを得た」と喜んだという。

(追記) 八月二十九日、筆者は三原市の仏通寺を訪れ、県立公園の中の静かな寺域に立って、愚中周及の行道を偲んだ。寸暇を割いて面接して下さった藤井虎山老師にこの小稿を捧げ、感謝の意を表す次第である。なお、十一月二十五日、禅文化研究所に於て、加藤正俊師の「愚菴義竜について」の研究発表を拝聴し、江戸時代の愚菴が愚中の禅風を慕って、丹後の自庵に「肯心庵」と命名した事を知り、ここに付記する。

(本学教授―漢文学)